

「万葉集に詠われた飛鳥川」

- ・万葉集には飛鳥川の色々な流れのありさま、即ち「飛鳥川の態様」。
- ・その土地に住んでいる人々の「暮らしの里川」。
- ・「飛鳥川の流れに靡（なび）く玉藻」の幻想などが詠われている。
- ・さらに、都が飛鳥から藤原宮・奈良へと遷ったあとの「飛鳥古京」と呼ばれた時代に飛鳥川が詠われた歌がいくつもある。

あすかこきょう

1) 「飛鳥古郷の象徴として」

・奈良遷都の後、明日香の故郷を思いやって詠われた次の歌がある。

今日もかも 明日香の川の 夕さらず

かはづ鳴く瀬の 清けくあるらむ

よや

作者・上古麻呂 かみのこまろ 卷三―356

（解説）

今日もまた、明日香の川の、いつも夕方になると蛙が鳴くあの瀬は、すがすがしく清らかに流れていることであろうか。

(写生地)

奈良県の中央部に位置する明日香村の中心部を北流する飛鳥川を描く。

(池田杏花)



2) 「飛鳥川を禊ぎの川として。」みそ

・飛鳥川は時には奈良の都からはるばる訪れて禊ぎをする川でもあった。禊ぎは身に罪または不潔・不浄等の穢れけがのある時に川や海で身を洗い清めることであり万葉集には次の歌がある。

◎第四十五代天皇・聖武天皇の寵愛ちようあいが噂うわさになった「八代女王、天

皇たてまつに献たてまつる歌一首」

こと しげ ふるさと

君により 言の繁きを 故郷の 明日

みそ

香の川に 禊ぎしに行く

「二には、尾びに「龍田越えたつた 御津の浜辺にみそぎしに 行く」といふ

作者・八代女王 卷四―626

(解説) 君(天皇様) ゆえにひどく噂を立てられていますので、

その穢れけがを洗い流そうと、故郷の明日香の川に禊ぎをしに参ります。

・左注にある尾びに「龍田越えたつた 御津の浜辺にみそぎしに行

く」といふ。とあるのは古代みそぎの場として飛鳥京の飛鳥川
だけでなく難波の宮の御津浜も重んじられたので歌の末尾の飛
鳥川だけに限らないとの意である。「龍田は大和国(現・奈良県)
と河内国(現・大阪府)の境の山「龍田山」であり古代、大
和国からはこの山を越えて御津(難波宮の港)の浜辺に至った。

(参考文献)新潮日本古典集成「万葉集」明日香村村史、伊藤博著「万葉集釈注」等。

(写生地)古代の難波宮の港が近辺にあったと伝えられる現在の大阪港を

描く。(池田杏花)

